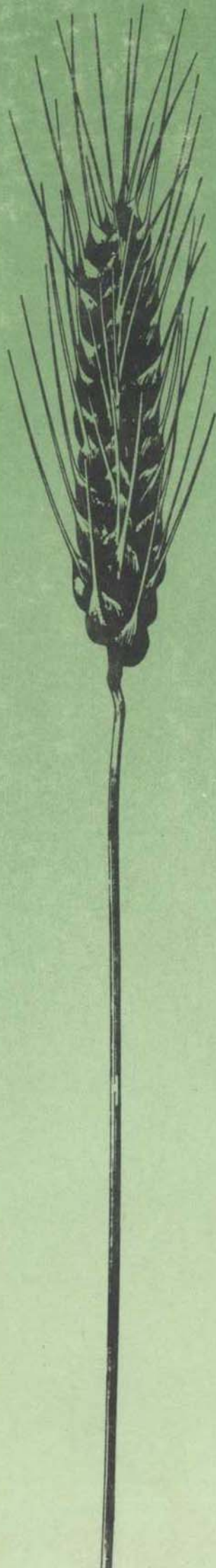


金融資本論 1



● ルドルフ・ヒルファディング著
● 林 要訳

国民文庫 II
420a

大月書店

国 民 文 庫

420_a

新 訳

金 融 資 本 論

(1)

ヒルファディング 著
林 要 訳



大 月 書 店

ヒルファディング『金融資本論』(Rudolf Hilferding, „Das Finanzkapital“) の日本語版出版独占権は、1961年6月15日に大月書店が取得した。

改訳にあたって

これは RUDOLF HILFERDING, „DAS FINANZKAPITAL, eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus“, mit einem Vorwort von Fred Oelsner (Dietz Verlag, Berlin 1955) の全訳である。

わたしがヒルファディング著「金融資本論」を訳したのは、ちょうど三五年まえだった。そのときわたしの書いた「まえがき」によると、それは「……一九二六年の三月からその年末にいたるまでの余暇を利用した労働の所産で」、「稿のなるにしたがって分冊刊行し、三冊をもって完結した」のだが、それを一冊にまとめたのは、翌一九二七年の秋だった。この弘文堂版が改造文庫版に組みかえられたのは一九二九年で、それから二〇年近くたった一九四七年、さらに世界評論社から戦後版が出た。改版ごとの字句の訂正はわずかだったが、それから五年して組みかえた大月書店版は、いちおう改訳本だった。が、全体にわたり文体をあらためるのが主だった。その序文によると、「この拙訳がはじめて世に出てから、二十五年ほどになる。そのあいだ、いくどか版は改められたが、改訳の機会がないまま、戦後もすでに久しく絶版になっている。こんど大月書店の熱心さに動かされて改訳の筆をとることになり、大みそかの朝から伊豆の梅のほころびる

二月のはじめにかけて、日に二度の食事と三度の入浴のほかは、ペンを手から放さ』なかった、とある。

それはどうでもいいが、この序文中の翻訳権にかんする次の一節は、煩をいとわず、ここに再録する責任があろう。それには、こうある。――

『なお、この機会に一言しておかねばならないのは、翻訳権のことである。わたしは、一九二六年、はじめて訳筆をとるにあたり、ときの版元弘文堂をつうじて、それを中西寅雄氏から、こころよく、ゆずられた。氏は、それよりさき、東大からドイツへ留学して、原書の出版者および著者と親交をむすばれ、したしくサインされた翻訳権譲渡の書類をたずさえて帰国されたのであった。

このいきさつは、当然、初版に述べられねばならぬものであった。が、そのことのなかったのは、複雑な当時の社会情勢上、あやまって累を氏におよぼすことをおそれた訳者の、ひとりがてんの老婆心からであった。こんどの改訳にさいしては、まず、わたしは、氏を東京都商工指導所所長室にたずね、かさねて好意を謝するとともに、この機会に、おくれはせながら事情を公表することの了解をえた。

未熟なこの改訂版が、同氏ならびに原著者――一九四一年（昭和十六年）九月十七日、ヒットラーの占領下、フランスの刑務所で縊死体として発見されたという原著者――の好意ある最初からの期待に一步でも接近できたら、このうえない幸である。』

と。この序文は、『一九五二年四月三日』の日づけになっている。

この大月書店版から三年のあと、国民文庫版（一九五五年）が出た。そのときも、いくぶんの加筆がなされた。これが、わたしの最後版だった。

ドイツ版の原本も久しく絶版のままだった。その新版が出たのは一九四七年だったが、わが国への輸入がとだえていたため、いちはやく大月書店がそれを手に入れたのは、その第二版だった。これが、わたしのこの改訳の台本となったわけだが、これには Fred Oelgner による新しい序文がついていて、かねて大月書店はこれをわたしに訳させて、それを前記の大月書店版につけ加え（一九五九年）、その刊行をつづけていた。しかし、この大月書店版は、わたしの最後版ではなかったので、わたしとしては、いささか負い目を感じていたところだった。そこで、すすめられるままに、こんど思い切って大月書店版はもとより、最後版である国民文庫版もみな絶版に付して、あらたに改訳の筆をとることにした。あたらしい原稿紙にむかったのは昨一九六〇年の元日の早朝だったが、筆をおいたのは、ことしの春になってからだった。

エルスナーの新版序文は原文三一ページにわたる長文で、ヒルファディング『金融資本論』の功績をたたえ、そのあやまりを指摘し、さらに、その総括的評価をあたえている。そのほかでは、旧版の明白なミスプリントのいくつかが訂正されているほか、一九一〇年の初版らしい内容に変わりはない。

『この若きクラシックが、ドイツ文でドイツ人のよむにちかい程度の正確さと平易さとで、邦人のあいだに、ひろく読まれえんことが、いつも訳者のねがいではあった』と、若気のいたりで壮語した三五年まえの『訳者のねがい』が、いま、ほんのいくらかでも、かなえられたら、さい

わいである。

一九六一年三月

久我山の鶯鶯居にて

林

要

読者への注意がき

- (1) 活字に傍点のあるのは、原文がイタリック（ななめ文字）になっているもの。ただし、序文の署名のばあいだけ、ゴシック（肉ぶと文字）にした。
- (2) 「」式カッコ内の文字または記号は、すべて訳者のもの。それは理解をたすける目的で訳者の老婆心から、補足のため、説明のため、そのほかの理由で、本文ちゅう随所にくわえられた。
- (3) 原文でまれに用いられている「」式カッコは、訳本ではへゝ式で示されている。
- (4) おもな人名には、その出てくる最初の機会に、その正式な氏名および生年・没年を原語で記入した。
- (5) 注記のなかの人名、著書名、新聞雑誌名、そのほか固有名詞的なものは、原則として、そのままにしておいた。
- (6) 引用書に邦訳のあるものは、なるべく付記したが、訳文の責任は、わたしにある。
- (7) かなづかいが新かなづかいによった。送りがなは、もっぱら新聞協会新用語懇談会のきめた「送りがなのつけ方」にしたがった。

目次

改訳にあたって……………	三
読者への注意がき……………	七
新版序文（エルスナー）……………	二一
原著者序文（ヒルファディング）……………	四九
第一篇 貨幣と信用	
第一章 貨幣の必然性……………	五五
第二章 流通過程における貨幣……………	七五
第三章 支払手段としての貨幣。信用貨幣……………	一八
第四章 産業資本の流通における貨幣……………	三〇
貨幣資本の周期的な遊離と休息……………	三七
休息資本の量の変動とその諸原因……………	四五
信用による休息貨幣資本の機能貨幣資本への転化……………	五三

第五章	銀行と産業信用	二五
第六章	利 子 率	一九〇
第二篇	資本の動員。擬制資本	
第七章	株式会社	二〇五
一	配当と創業者利得	二〇五
二	株式会社の金融。株式会社と銀行	二三二
三	株式会社と個人企業	二三九
四	発行活動	二五一
第八章	証券取引所	二五五
一	取引所証券。投機	二五五
二	取引所の諸機能	二七一
三	取引所の取り引き	二七九
第九章	商品取引所	二九四
第一〇章	銀行資本と銀行利得	三三九

下巻目次

第三篇 金融資本と自由競争の制限

第一章 利潤率均等化の障害とその克服

第二章 カルテルとトラスト

第三章 資本主義的独占と商業

第四章 資本主義的独占と銀行資本の金

融資資本への転化

第五章 資本主義的独占の価格決定。金

融資資本の歴史的傾向

第四篇 金融資本と恐慌

第六章 恐慌の一般的諸条件

第七章 恐慌の諸原因

第八章 景気の経過における信用関係

第十九章 沈滞期における貨幣資本と生産

資本

第二十章 恐慌の性格における変化。カル

テルと恐慌

第五篇 金融資本の経済政策

第二十一章 貿易政策における転換

第二十二章 資本の輸出と経済領域をめぐる

闘争

第二十三章 金融資本と諸階級

第二十四章 労働協約をめぐる闘争

第二十五章 プロレタリアートと帝国主義

新版序文

『金融資本論』の功績

この世紀の転換期にあたって資本主義的世界経済に新しい諸現象があらわれた。それらは資本主義の構造的変化をしめすものだった。古い資本主義にとって典型的な自由競争と自由貿易とは、独占体によってますます抑制されることになったが、これらの独占体は生産の急激な集積から発展したものである。銀行もまた同様な集積過程を経験し、それによって機能転換をまぬがれなかった。銀行ははじめ独自の支払い媒介機関だったが、発展して産業への金融機関となった。そして産業資本と銀行資本とが癒着してついに金融資本となった。資本主義の発展した諸国では、生産と資本との集積が莫大な資本過剰をもたらし、この資本過剰がますます資本の輸出へとかりたてた。資本主義的独占にとって国境がせますぎることになり、そこで国際的な独占体がうまれて、世界の経済的分割をはじめた。そして、そこにおこったのが、この地球の地域的分割をめぐる列強間の気ちがいじみた競争戦である。この競争戦により、地球はだいたい今世紀のはじめには列強間に分割されおわった。こうした発展によって、古い資本主義は新しい資本主義つまり独占的

または帝国主義的資本主義にかわった。

カール・マルクス Karl Marx [Karl Heinrich Marx. 1818—1883] とフリードリヒ・エンゲルス Friedrich Engels [1820—1895] とは、古い資本主義をあますところなく分析し、その運動諸法則を発見して説得的に記述したが、資本主義のこの新しい発展を体験することはできなかった。かれらはこの発展を天才的予言で暗示しえたにとどまる。あたらしい資本主義を分析し記述することは、つづく世代のマルクス主義経済学者たちの仕事にのこされた。これらの経済学者のうちで、ルドルフ・ヒルファディング Rudolf Hilferding [1877—1941] は、その『金融資本論』により傑出した地位をしめている。かれが序文でいっているように、かれの『資本主義の最近の発展についての研究』は、すでに一九〇五年には完成していた。近代資本主義の特性をヒルファディングは、『一方ではカルテルやトラストの形成による「自由競争の止揚」となってあらわれ、他方では銀行資本と産業資本とのますます緊密化する関連となってあらわれるところの、集積過程』だとみた(本訳書・上・四九ページ)。かれがこの第二のほうの現象形態をその分析のおもな対象としたことは、かれの著作の表題からもすでにわかることである。このため、かれは——のちに示すように——いくつかの基本的な理論的あやまりにおちいり、そのため資本主義経済の新時代の全貌をつかむことができなかった。とはいえ、このような欠点にもかかわらず、『金融資本論』はマルクス主義経済理論の重要な発展をあらわしている。執筆いらい四〇年にもなるのに、この著作は現実的意義をうしなっていない。しかも、この著作はいまでも科学的な深さと鋭さとの点で、ブルジョア経済学が金融資本について言いたいっさいのものより、まさっている。

ヒルファディングは金融資本をその研究のテーマとした。そこで、論理上当然にも貨幣理論をもつて説明をはじめめる。かれは貨幣理論の領域でこそ誤りをおかしたが、マルクス主義信用理論の発展では重要な一步を前進させた。かれは、生産資本家じしんが主として与えて現金のかわりをつとめる流通信用と、休息貨幣を機能貨幣資本にかえる機能をもつ資本信用との区別を發展させた。貨幣資本の周期的な遊離と休息とについて、あらかじめ深い試掘的研究をしておくことは、資本信用が資本主義的發展にたいしてもつすぐれた意義をはつきり認識させるものである。

本書でもっともすぐれた部分は、資本の動員と擬制資本についての篇〔第二篇〕であり、わけでも株式会社の分析である。ここでかれのなす基本的な経済上の一発見が創業者利得である。地価を地代の資本還元されたものとするマルクスの展開にたよって、ヒルファディングはこう証明する。創業者利得は利潤うみ資本を利子うみ資本に転化することから発生するものであって、企業者利得を資本還元したものをあらわし、そこから生まれる収益は『創業者』の、したがって、たいていは銀行のポケットに流れこむ、と。これによつてヒルファディングは、創業者利得（または創業者利得——かれはときにそうもいつている）が『詐欺でもなければ補償や報酬でもなくて、独自の経済的一範疇である』（本訳書・上・二四ページ）という証拠を出したのである。この経済的範疇を発見し展開したことは、ルドルフ・ヒルファディングの不滅の功績である。かれはこの創業者利得の式をも示しているが、具体的な実例について、この式をつかえば、どんなに莫大な金額が発行活動によつて銀行にながれこむかを容易に計算することができる。ヒルファディングは同時に、この経済的創業者利得が、たんに会社の新設のさいや既存の私企業の株式会社化のさいに

えられるだけでなく、既存の株式会社のどんな増資にさいしてもえられることを証明している。ヒルファディングのこの発見は、銀行資本の集積がどうしてそう急調子ですすみえたかを説明してくれる。というのは、創業者利得こそが大銀行の手に莫大な富をあつめさせる手段だったからである。創業者利得の発見は、マルクス主義経済理論の重要な進展をあらわすものであり、金融資本がなぜ急激に普及したかの理解をわれわれに可能ならしめるものである。

ヒルファディングは株式会社の研究においても、この企業形態によって資本主義が民主化されるなどというおしゃべりの不合理性を抵抗しがたい論理でばくろする。かれは株式会社によってこそ初めて巨大な他人資本の処理権が小さな一団の大資本家たちの手にあたえられることを証明する。わけでも、いわゆる参与制度、つまり子会社、孫会社および曾孫^{ひひこ}会社の創立によって、大資本家たちのこうした金融的力はおそろしく高められる。ヒルファディングが本書で株式会社にについて言っていることは、いまでもまだ完全な妥当性をもっている。

取引所の諸問題も、ヒルファディングにあつては新しい光のもとにあらわれる。擬制資本の市場としての取引所のあたらしい役割を研究して、かれは大銀行の発展につれて取引所の意義が後退するという結論にたつする。この事実、ヒルファディングにさきだつてシュルツェ・ゲファニツ^{ニツ} Schulze-Gävernitz [Gerhart von ~, 1864—1943] やリーサー^{ニツ} Riesser などのブルジョア経済学者たちがすでに確認したところではあつた。だが、ヒルファディングの理論的研究の光のもとにおいて初めてこの発展の必然性がくまなく明瞭となる。

ヒルファディングのこの本では、金融資本の発展の研究と自由競争の制限とが多くの紙面を占

めている。そうしたうえで、ヒルファディングは近代資本主義の他の特徴的現象たる独占に話をすすめる。そのさいヒルファディングは独占理論を發展させるために、いくつかの鋭い指摘をおこなっている。たとえば企業連合コンビナチオンの發生する原因を説明するさいや、同部面的結合と異部面的結合とを區別するさいなどである。それでもまだ近代資本主義のこの本質的側面についての展開がよわすぎるように、わたしにはみえる。それはヒルファディングの原則的にあやまった出発点の一結果である。が、それについては、のちにのべる。ヒルファディングがカルテルやトラストを論じる一章で生産の集積をかえりみず、そのけっか資本主義的独占の發生する必然性を説明していないのは奇異に感じられる。ときたま、この点にふれることはある。たとえば、かれが独占的結合を「マルクスの集積理論の実現」だとするばあいのごときである。しかし、独占が集積から、大経営の發生から有機的に發展することを、かれは見のがすのだ。

ヒルファディングがカルテル価格（独占価格）について言っていることは、ブルジョア科学が独占資本主義のこのおそらくはもっとも複雑な範疇について明らかにしたいっさいのもののように、高くそびえている。正当にもヒルファディングはいう。独占価格は需要からだけ説明できるものではなくて、ある経済的内容をもたねばならない、と。ヒルファディングによれば、カルテル価格も、費用価格プラス平均利潤率「平均利潤？」にひとしい。（これまでの諸版では、生産価格プラス平均利潤率「平均利潤？」となっていた。あきらかにミスプリントだ。というのは、生産価格は、費用価格プラス平均利潤率「平均利潤？」だからである。）とはいえ、ヒルファディングのいうところによれば、平均利潤率が変わっているのだ。「それ「平均利潤率」は、カルテル化した大産業のば

あいと、この大産業への従属におちいつている小産業中の小諸部面のばあいとは、ちがう……」のである。そして、かれは「そこで、カルテル価格の引き上げは、カルテル能力のない諸産業における利潤率引き下げの可能性を限界とする」(本訳書・下・九八―九九ページ)という結論にたつする。(この限界線のひきかたは、せますぎるようにみえる。そこで、カルテル利潤(独占利潤)は非カルテル産業の剰余価値からうまれるだけではなく、消費者が独占資本におさめる貢物でもあるからだ。そのことをヒルファディングも部分的にはみとめており、『だから、カルテル利潤の一部分は消費者からうまれる。ここで消費者というのは、派生的所得のある非資本主義的な人たち全部のことである』(本訳書・下・一〇〇―一〇一ページ)といっている。派生的所得をえる消費者にかぎることは、がてんがいがない。なぜなら、独占利潤の合理的な説明は、いわゆる純粋資本主義においては不可能だからである。周知のように、独占利潤の著大な部分の源泉は、自立的な中間階級の搾取およびわけでも農民の搾取である。産業生産物の価格と農業生産物の価格とのあいだの『鉄状差』^{シュタール}は主として独占に由来する。とりわけ資本主義的『母国』による植民地の搾取は、独占利潤にとってまったく有利な源泉をなしている。帝国主義的大国と植民地諸国とのあいだにおける非等価交換の存在はよく知られたことであって、事実で証明するまでもあるまい。

金融資本と資本主義的恐慌との関係については、ヒルファディングの本で特別の一章(一章ではなくて一篇)があてられている。ここでも読者は理論的なあやまりにぶつつかるが、それはほかのところでも述べることにしよう。それにもかかわらず、ヒルファディングは、マルクス主義恐慌理論をも新しい本質的な諸観点でゆたかにした。たとえば利潤率の傾向的低下の法則と恐慌との関